

『オルドス民話収集』(1) —銭世英著、1999 年、フフホト—

訳 児玉香菜子

1. 『オルドス民話収集』について

本テキストは『オルドス民話収集』(内蒙古人民出版社、1999 年)の一部を翻訳したものである。原著名は『鄂尔多斯民间采风』、著者は銭世英である。言語は漢語である。原著には著者が中国内モンゴル自治区オルドス(鄂尔多斯)地域¹で収集整理した民話 86 話が収められている。

著者の銭女史は 1953 年オルドス市ウーシン(烏審)旗²生まれ、「モンゴル族牧畜民の末裔(あとがきより)」で、ウーシン旗文化局長、ウーシン旗文学芸術連合会長と『ウーシン文芸』編集幹事の経歴をもつ。女史のペンネームはモンゴル語で魚を意味するジャガス(扎格斯、吉各斯)で、おそらくこれが本名であろう。

本テキストは「動植物の民話」、「人物の民話」と「神話物語」の 3 つに分類されている。「動植物の民話」に収められているのは 28 話、「人物の民話」は 34 話、「神話物語」は 24 話である。

各民話の最後に口述者の氏名と収集整理年が明記されている。民族の表記はない。採集整理年をみると、最も古いのは 1978 年で、新しいのは 1996 年である。約 20 年近くをかけて集めたものである。

本テキストの多くは著者の父母と 2 番目のおばより採集されたものである。父の名はバーバ(巴巴)、母の名はウサラゴワ(烏莎拉高)、叔母の名はガチンス(嘎慶蘇)である。ただし、それ以外の名前も少なくなく、漢人も含まれている。著者の出身と口述者から考えて、民話の主な採録地はウーシン旗であろう。

今回翻訳するのは 12 話で、「動植物の民話」より 6 話、「人物の民話」が 4 話と「神話物語」が 2 話である。それぞれの末尾に原題と原著の頁番号および口述者の氏名(民族)、収集整理年を記した。民族は氏名表記から類推したものである³。口述者がモンゴル人の場合は、モンゴル語で語られたものを著者が漢語に翻訳していると考えられる。

テキスト紹介前にオルドス地域ウーシン旗について概観しておきたい。

2. オルドス地域ウーシン旗の概要

オルドス地域は内モンゴルの西南部に位置し、チベット高原から北上してきた黄河が陰山山脈にぶつかり、大きく南に展開する湾曲部内部にある高原地帯である。オルドス地域には北西部と南東部に

¹ 行政名は鄂尔多斯市、かつての伊克昭盟。

² 旗とは内モンゴル自治区、吉林省ほかモンゴル族居住区での行政名。中国の県(県)に相当する。盟の下位行政区分。

³ オルドスのモンゴル人の名前の漢語表記はモンゴル語名の音訳であることがほとんどである。

広範囲に広がる流動砂丘地帯がある。南東部の流動砂丘地帯に位置するのがウーシン旗である。ウーシン旗は降水量が比較的多く、かつ中国の古都西安のある陝西省に接する。したがって、オルドス地域にはその南東部から絶えず漢族とその文化、特に農耕文化の進出を受けてきた。よって、ウーシン旗の特徴の一つとして、モンゴル族が主体の行政地区でありながら、中華人民共和国以前から漢族人口が多いこととモンゴル牧畜民への農耕普及があげられる。

中華人民共和国が成立する 1949 年のウーシン旗の人口は 28,668 人、その内訳は、モンゴル族が 12,886 人、漢族が 15,782 人である（烏審旗誌編纂委員会 2001：162）。それぞれが総人口に占める割合はモンゴル族が総人口の 45%、漢族が 55%で、割合はほぼ半々であるが、漢族の人口がモンゴル族の人口をすでに上回っている。

これらの漢族は、19 世紀の末清朝政府がおこなった「開放蒙地」と「借地養民」政策による移民や内地の紛争による難民であった（楊 1991；2003）。漢族商人に莫大な借金を作ったモンゴルの王公たちが漢族に牧地を売ったり、牧地を耕作させて租税をとったりしたため、より一層の漢族流入をまねいた（モスタールト 1986：274）。漢族の入植に反対して、19 世紀末から「ドゥグイラン」とよばれる大衆運動がおこっている。貴族も庶民も階級をこえてこの大衆運動に参加した（楊 2002：11）。万里の長城付近で牧畜を営んでいた牧畜民は、陝西省への牧地の割譲と漢族の大量の流入による漢族との混住をきらって、北上していった。牧地の売却と漢族の入植によってウーシン旗と陝西省との境界線は約 60km も北上し、かなりの面積が陝西省に割譲されている。

さらに、漢人の流入は続く。ウーシン旗の総人口は、1949 年から 1990 年までの 40 年の間に約 3 倍に増加した。人口増加を民族別にみると、モンゴル族の人口が過去 40 年の間におよそ 2 倍増加しているのに対し、漢族の人口はモンゴル族の 2 倍にあたる 4 倍も増加している。漢族の人口は中華人民共和国が成立して間もない 1953 年から増加をはじめた。この漢族人口の増加は外部から漢族が大量に移住したことによってもたらされたものである。その後も漢族人口はモンゴル族人口より急角度で上昇し続けた（児玉 2005）。その結果、1949 年にモンゴル族と漢族の人口はそれぞれほぼ半数を占めていたが、2014 年現在ウーシン旗の総人口は約 11 万人で、そのうち少数民族は 32,586 人で⁴、約 3 割を占めるに過ぎない。

おもな生業は農業と牧畜である。漢人は農業、モンゴル人は牧畜と、生業と民族はある程度対応している。しかしながら、漢人も家畜を飼養していたし、中華人民共和国成立以前より、ウーシン旗の牧畜民は農耕をおこなっていた（モスタールト 1985；児玉 2014）。牧畜民の飼養していた家畜はヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ、ラクダである。主な栽培作物はキビで、そのほかにマージ（*mayji*）と呼ば

⁴ ウーシン旗人民政府 HP「烏審旗 2014 年国民经济和社会发展统计公报」
http://www.wsq.gov.cn/xxgk/tjxx/201505/t20150507_1383808.html（2016 年 9 月 15 日）

れるゴマ⁵、ソバ、ジャガイモ、トウモロコシ、大豆であった⁶（児玉 2014）。

3. オルドス民話について

こうした自然のおよび歴史的環境から、モンゴル人と漢人が暮らし、かつ、モンゴル人は牧畜だけでなく農耕もおこなってきたことがこの地域の特色である。それは民話にも反映されている。今回紹介する「ヤギの農作業」はヤギが農業をする、という話である。ちなみにヤギはモンゴル牧畜民が「家畜」とする五畜のうちの一つである。「2 人のけちん坊」という民話の語り手は漢人であり、なおかつ、その主人公も漢人である。

オルドスの民話といえば、ベルギー生まれで、1906 年から 1925 年までの 19 年間で伝道のためにオルドスで過ごしたアントワーン・モスタールト師によって編まれた『オルドス口碑集』（1966 年、磯野富士子訳）が著名である。これらはその多くがオトク旗南東部とウーシン⁷旗の南部に滞在中に採集されたものとある（モスタールト 1966 : 6-7）。このことから、同書との類話が少なくないことが予想されるが、実際には類話は多くない。本編で紹介する民話では 3（1）の「老人長寿の物語」、『オルドス口碑集』では「孝行息子」（モスタールト 1966 : 109-113）が該当する。しかし、モチーフは同じであるが、細部には異なる点が多い。また、『オルドス口碑集』の口述者はモンゴル人のみで、漢人からも再録している本テキストとは異なる。

本著の特徴はモンゴル人だけでなく、漢人からも民話を採録し、地域の民族的、生業的な背景を反映していることにあるといえよう。

4. 動植物の民話

（1） キツネとオオカミが「友になる」

森林にはたくさんの動物がいる。みな一緒にいて心から相手に接し、お互いに助けあっていた。ただキツネとオオカミだけがみなとは異なり、この 2 匹はウソつきでずる賢く、あれこれと悪だくみをし、凶悪残忍で自分勝手に、信義を重んじない。そのため、動物たちは誰も彼ら 2 匹と付き合わず、ましてや彼ら 2 匹と友になろうとしなかった。

オオカミとキツネはみなが自分たちを相手にしないので、面目をつぶされていると感じた。同時に、彼らも孤独で寂しいのが嫌で、進んで一緒になってなれなれしくして、友達になった。

キツネはオオカミの肩をたたきながら、そらぞらしく云う。「オオカミ兄さん、動物王国のなかで、

⁵ 種はゴマ油の原料にする。皮をはいでとったものは麻（*oloso*）になる。麻でマーハイ（*maxai*）と呼ばれる靴を作る。

⁶ 飢饉の際には、砂丘などに生えるチョリヒル（*čuliqir*）とよばれる草本植物も食糧としていた（モスタールト 1985 : 79-80）。

⁷ 原典ではウシン（モスタールト 1966 : 6）。

わたしが一番尊敬しているのがあなたさまだ。何をするにしても仕事は本当にまじめで、しかも能力がある。他の動物1匹たりとも、わたしは目にくれない。」

オオカミは聞くと有頂天になり、キツネはまた云う。「そうですよ。わたしもあなたをととても尊敬している。賢く利口で、度量が並はずれている。」

キツネは頭をすばやく回転させながら、云いながら考えた。「このオオカミは一貫して心が残忍で腹黒く、狩りの腕も悪くない。もしこいつと友になったのなら、オオカミのこの技能を利用し戦利品の分け前にあずかり飢えをしのごう。」そこで、キツネはできるだけあれこれおだてて云う。「オオカミ兄さん。わたしたち2人は心が通じ合っています。わたしたち2人が友になって、お互いに長所を取って、短所を捨てたのなら、今後享受できないほどの福が保障されますぜ。」

オオカミは考えた。「キツネは悪賢くあれこれ考え、悪巧みも当然多く、キツネと友になったら、きっと損をしないだろう。」そこでオオカミもにこやかに云った。「なろうじゃないか。わたしたち2人が友になり、2つの思いを1つにすれば、必ず大事をなすことができる。」

2匹のこいつらは意気投合した。キツネは自分の気持ちを見せるために、すぐに山を下りて、一羽の鶏を盗み、ニワトリの血を碗に入れて捧げ持ちかえってきて、オオカミに云うには、「オオカミ兄さん、友になると口で云うだけではだめです。わたしたち一緒にニワトリの血を酒だと思って飲んで、正式に天地を拝み、兄弟になってこそ、真の、どんなことがあっても別れない、不変の兄弟になったといえます。」

オオカミは心の中で、やはりキツネは気がまわると計算した。そこで、キツネと一緒に天に向かって誓った。「今後2つの思いを1つにし、永遠に友となり、苦楽を共にする。」誓いを立ておえると、キツネはニワトリの血をオオカミに捧げ、オオカミはいやしく並々とつながれたニワトリの血をながめ、そして受け取ると一口で飲み干しました。

キツネは空のお椀を受け取ると、心の中では少し不愉快だったが、とてもうれしそうな様子を装って、キツネはお椀をなめなめし、云う。「今日はオオカミ兄さんと一緒に、本当に痛快だ。」

オオカミはお椀の血を飲み干しても、まだ満足せず、尋ねた。「鶏肉はどこへ行った？」

キツネは急いで答えた。「友になり、兄弟の契りを結ぶ、重要なのは天地を敬うことであって、ニワトリの血だけを重んじるのであって、肉は食べないものです。そのため、わたしは肉を捨てました。」

オオカミはこれを本当と信じて、再び問い詰めなかった。

オオカミが去った後、キツネは峠に急いでこっそりやってきて、ついさっきどこかに隠した鶏肉を探し出し、がつつと食べ始めた。食べながら、得意げに独り言を云った。「幸い、俺様は賢いから、頭を働かせて計略したおかげだ。そうでなきゃ、あの貪欲な奴に全部食われていた。」思いがけず、この一幕をちょうどここを通りかかったオオカミに見られてしまった。

オオカミは恨みを抱いた。キツネに目にものを見せてやると心に決めた。この日、キツネは1匹の

子ヤギを捕まえ、先に肉を食べ、残った骨をテーブルの上に残しておき、キツネを招待しに行った。キツネは心から喜んで宴会にやってきたが、まさかオオカミが骨で自分を招待するとは思わず、内心「見てろよ。」とつぶやいた。

ある日、オオカミはうっかり川に落ちてしまい、危機に瀕してもがきながら、大声で叫んだ。「助けて。助けて。」

キツネはオオカミが助けを呼んでいるのを聞くと、走ってきて、岸の上で眺めている。命の危機にあるオオカミはキツネを見ると、まるで生きる希望を見つけたように、大声で、「兄弟、早く私を助けに来てくれ。」と叫んだ。

キツネは落ち着いて条件を出した。「そうだ。わたしはあなたの兄弟だ。でも、本当の兄さんはまだけりをつけていません。あなたが最初に始めたのですよ。わたしがあなたを助け出した後、あなたはわたしにどのようにお礼してくれるのか云ってください。」

オオカミは聞くととても憤慨したが、他にどんな方法があるだろうか。ただ怒りを抑えて我慢して云う。「きょうだい、実はわたしはあなたのことを考えていたのです。昨日一匹のヒツジを捕まえ、半分自分で食べ、半分残して、あなたを呼んで食べてもらおうと思っていたのですが、しかし、ちょうど道半ばで、」

キツネは聞き終わると、「わかりました。わたしは今ちょうど腹が減って腹が鳴っています。どこにあなたを助ける力があるか。待っていてください。わたしが先にあなたのお宅に行って腹を満たすのを待って、それから戻ってきてあなたを助けよう。」言い終わると、身を翻して、行ってしまった。

《原典》原題「狐狸和狼“交朋友”」、6-8 頁。バーバ（著者の父、モンゴル人）口述 1989 年採集整理

（2） 子馬とサカツラガン

子馬は生まれながら利口で機敏、強健な肉体と精神をもっていた。子馬は生まれてこのかた、両親に可愛がられてきたが、この何でも簡単に手に入る生活は退屈だと感じていた。

思慮深い母は子馬の考えを見抜いた。母は次のように考えた。「子馬は確かに成長した。息子に世に出して生きる術を学ばせる時なのかもしれない。」そこで、「子馬よ、母さんは最近とても忙しく、おまえに母さんを助けて重要な仕事を担って、テングリ山⁸に行って父さんに糲を届けてくれないかしら。」と云った。子馬はそれを聞くと興奮して躍り上がって喜んだ。

子馬は糲を背にのせて、母のいうとおりに旅立った。家を離れて初めての遠方への旅立ちに子馬は

⁸ 新疆ウイグル自治区にある天山山脈のこと（中央民族大学蒙語系サランゲレル教授のご教示による）。

言葉で表せないほど興奮し、とても張り切って自信に満ちている。ダダダッと、砂煙をまきあげると数キロも駆け出した。道中、子牛に出会くと、子牛は気遣うように訊いた。「子馬兄さん、あなたは意気盛んな様子ですが、どこに行こうとしているのですか。」子馬は得意げに、「わたしはテングリ山に行くのだ。」と答えた。

「え、そこは本当にとても遠いところです、行くことができますか。」

「行けます。」子馬は子牛に別れを告げて道を急いだ。かなり進んでも、テングリ山の影も形も見えず、子馬は少し焦って、ちょうど川辺で日向ぼっこをしていた亀にたずねた。「亀おじさん、テングリ山までどれくらい遠いのですか。」

亀は答えた。「とてもとても遠いです、少なく言っても 150 キロ以上あります。」

子馬は躊躇した。この時、サカツラガンが飛んできて励まして云うのは、「子馬さん、躊躇する必要はありません。150 キロは胸に大志がない者にとってははるかに遠い旅程だが、胸に大志を抱く者にとっては、遠くはありません。つまり、道が長いことを恐れず、意志が弱いことを恐れなさい！」云い終わると、ガンは高く遠くに飛び去った。子馬はガンを見送っていると、たちまち胸がいっぱいになった。それ以来、子馬は大志を抱き、そのために努力奮闘し、鍛錬し、ついに一日に千里を行く立派な馬になった。

《原典》 原題「小马和鸿雁」、22 頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述 1994 年採集整理

（3） ラクダと犬

犬はいつも誰かをあざ笑うのを好み、他人の善し悪しを論じるのが好きだった。犬は一日中大通りの十字路にしゃがんで、長い舌をつきだし、三角の 2 つの目でにらみながら、きょろきょろ眺め、しきりに獲物を探して、けちをつけてはからかう。

1 匹の亀がやって来て、川辺で体を洗おうとしていた。犬はそれを見つけると、遠くからワンワンと吠えながら云うのは、「亀が歩くのはカタツムリみたいだ。のろのろして、人をじりじりさせるね。」亀は犬が云うのを聞くと、恥ずかしかったら穴に入りたいと思い、首をすぼめると向きを変えて帰ってしまった。犬は亀がびくびくして戻っていくのを見ると、うれしくて首を伸ばし、ワンワンワンととても勢いよく吠えた。

2 匹のアヒルがやって来た。アヒルたちは湖に泳ぎに行こうとしていた。犬はそれを見つけると、遠くからワンワンと吠えながら云うのは、「アヒルが歩くのはまるで卵をふるいにかけているみたいで、一揺れ一揺れ本当にかっこ悪い。」アヒルは犬が云うのを聞くと、恥ずかしくて顔を赤くし一時立ち往生した。犬はアヒルが足を止めて前に進もうとしないのを見ると、また首を伸ばして、ワンワンワンととても勢いよく吠えた。

3頭の子牛がやってきた。子牛たちは山のくぼ地に行き、新鮮でやわらかい青々とした草を食べようとしていた。犬はそれを見つけると、遠くからワンワンと吠えながら云うのは、「子牛は頭に角を生やして、2本のナイフを挿しこんだみたいだ。」子牛は聞くと、恥ずかしくて、頭を下げたまま小走りに戻っていった。犬は子牛が早足でこっそり逃げて行くのを見ると、ワンワンワンとさらに勢いよく吠えた。

ラクダの隊列がやって来て、遠くを旅し、砂漠に住む人たちに物資を届けようとしていた。犬はそれを見つけると、遠くからワンワンと吠えながら云うのは、「ラクダさん、ラクダさん、なんて馬鹿なのだろうね。家に帰って寝た方がよっぽどよいのに。」ラクダは聞くと互いに顔を見合わせた。先頭のラクダが見下げて云うのは、「自分の道を行こう（気まま勝手です）。犬が吠えるのが好きなら、そうさせておこう。」ラクダは大通りに沿って頭をあげて闊歩して前に進んでいき、カランカランとラクダの鈴が山谷に響き渡った。

犬は伸ばした首を縮めて振り返り、何か叫びたいと思ったが、敢えて口を開かなかった。口を開く勇気がなかったのだ。

《原典》 原題「駱駝和狗」、23頁。バーバ（著者の父、モンゴル人）口述 1993年採集整理

（4） 3匹のヤギ

3匹のヤギが連れ立って山の斜面で草を食んでいると、1匹の狼に見つかってしまった。狼は山の斜面をこっそり滑り下ってきて、3匹のヤギに向かって云うには、

「俺は腹が減った。おまえら3匹全員をたいらげてやる！」

1匹のヤギはそれを聞くと、おどろきのあまり全身がわななき、ぶるぶる震えて、地面にひざまずいてわびて云うには、「狼さま、後生だからどうか、わたしたちをお見逃してください。わたしはずっとこのご恩を忘れません。」

狼は冷たく笑って、「お前らを見逃して、俺は何で飢えを満たすのじゃ?!」と言いながら、とびかかっていき、一口でそのヤギをかみ殺して食べてしまった。

もう1匹はこのみじめな有様をみると、向きを変えてあわてて逃げ出した。狼がどうしてそのヤギを見過ごすだろうか。すぐ後について追っていき、そのヤギもかみ殺して食べてしまった。

残ったのはヤギ1匹だ。そのヤギは考えた。「助けを求めても無駄、逃げてても無駄なら、この狼と命懸けでやりあってやつを殺し、俺が生き残るにこしたことはないではないか。」そこで、守りを攻撃として、待ち構えた。狼がとびかかってくると、ヤギは2本のとがった刀のような角で狼に向かって刺しに行き、狼の片目を刺してつぶしてしまった。

狼は痛みのあまり甲高い声を一声あげた。狼は軟弱なヤギがあえて自分に向かって抵抗してこよう

とは夢にも思わず、一瞬あわてて、ヤギを落としてパッとかけ出して逃げてしまった。

《原典》 原題「三只山羊」、28 頁。バーバ（著者の父、モンゴル人）口述 1993 年採集整理

（５） ヤギの農作業

ヤギがチンゲン菜を 1 畝植えると、青々と成長して、その様子を楽しんでた。

ウサギがそれを見て云うのは、「ヤギさん、ヤギさん。大根を植えたらどんなにいいでしょうかね。葉っぱを夏に食べ、残しておいた大根を冬に食べて、なんて役に立つのでしょうね！」

ヤギはウサギをちょっと見て、ウサギの話はもっともだと思った。何も言わずに、チンゲン菜を抜いて、大根に植え替えた。

大根の芽がやっと出たときに、子馬がその畑を見て云うのは、「ヤギさん、ヤギさん。なぜ高粱を植えないのですか。高粱は収穫も多く、用途も多いです。精白した高粱は食用になるだけでなく、酒を醸造できますし、わらで精緻で美しい用具と手工芸品を編むことができます。」

ヤギは子馬をちょっと見て、子馬の話はもっともだと思った。そこで、大急ぎで大根を削り取って、高粱に植え替えた。

高粱をきちんと植えて、苗が出始めたところ、今度はおんどりに見られた。おんどりが云うのは、「ヤギさん、ヤギさん。黒豆を植えたらどんなにいいでしょう。てっとり早くて、しかも美味しいですよ。」

ヤギはおんどりをちょっと見て、おんどりの話ももっともだと思った。そこでまた鋤で高粱を取ると、黒豆に植え替えた。

ヤギは自分の考えがなく、だれの話聞いてももっともだと思い、あれこれ植えて、結局、植物の成長期に遅れてしまい、まるまる半年忙しく働いたのに、何の収穫もなかった。

《原典》 原題「山羊种地」、29 頁。バーバ（著者の父、モンゴル人）口述 1993 年採集整理

（６） ラクダとヤギ

ラクダとヤギはお隣さん同士だった。

ラクダはヤギをずっと馬鹿にしていた、ラクダとヤギが一緒になつときはいつも、ラクダはヤギに対して、自分がどんなにどんなに背が高く、体格が大きいかを自慢し、ヤギがどんなにどんなに小さいかをあざ笑おうとした。ヤギがついにこらえきれずに云うには、

「ラクダ兄さん、実際は我々にはそれぞれ長所と短所があります。あなたは体格が高くて大きいですが、動くのには不便という欠点もあります。わたしは背丈が小さいですが、代わりに行動が賢く、

機敏であるという長所があります。つまり、大きい中にも小さいものがあり、小さいものにも大きいものがあります（大小は変わらないこと、ひとつであること）。」

ラクダはそれを聞くと、アハハと大笑いして云うのは、「小さいヤギさん。あなたが、背が高く大きいラクダの私と優劣を論じるなど、本当に滑稽だよ。」

ラクダとヤギは一緒に山のくぼんだ所に行き草を食んだ。山のくぼみでは人家畜の往来が激しく、地面の草は踏みつけられ汚れて、新鮮ではない。ラクダは首を伸ばして、ちょうど木の上の葉っぱに届き、ラクダは得意げに木の上の葉っぱを食べながら、ヤギに向かって自慢して、「おい、ヤギ君、見たか。これが大きくて高いのが優れているということだ。聞くがね、あなたは今こんなに新鮮な食べ物にありつけるかい。」

ヤギは云う。「なぜできないのでしょうか。わたしは新鮮でやわらかい青草を食べられるだけではなく、種類もあなたより多いです。」

ラクダはどうして信じられようか。ラクダは頭を低く下げて、地面をさっと見るとヤギがいない。頭をあげるといつのまにかヤギは崖の上に登り、大きな口をあけてきれいで新鮮でやわらかい青草だけを食べているところが見える。

これより、ラクダは再びヤギを小さいとあざ笑うことはなくなった。

《原典》 原題「駱駝和山羊」、32 頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述 1994 年採集整理

2. 人物の民話

（1） 2人のけちん坊

昔、2人のけちん坊がいた。1人は張三と云い、もう1人は李四という名だった。

ある日、張三の誕生日に、李四が2つの卵を持ってお祝いに來た。とても丁寧な様子を装いながら、云う。「あなたに2羽のひよこを送ります。ただ、孵化までに2、3日足りていません。」

「なんてけちだ。」張三はうれしく思わなかったが、口には出さなかった。

ほどなく李四の誕生日をお祝いする際に、張三は2本の竹竿をもって宴会にやっけてきて、会って、時候の挨拶をした後、張三はにこにこ笑いながら云った。

「あなたに2本の美しいタケノコを送ります。ただ、2、3日大きく育ってしまいました。」

李四は、「この張三もなんてケチだ」と考えた。「前回わたしは彼に卵を2個送った。なんて云っても、まだ食べることもできるし、ひよこに孵化できる。しかし、彼が今日私に送ったつまらない竹竿は食べることができないだけでなく、植えて育つこともない。これは明らかに私に損をさせようとしているのではないか。」

そこで、李四は家族に命じて張三に白菜だけのテーブル料理を炒めさせた。食事の際に、張三は自

分のテーブルの料理だけ他人と異なっていることに気が付いた。料理が運ばれるたびに白菜だけで、肉が見えない。尋ねたいが、直接言いにくいので、それで、彼は李四を呼んできて、遠回しに李四に云った。「知っていますか。ある日、わたしは1キロの肉を買った。道中で鷹にくわえていかれた。鷹は急いで飛び立ったので、白菜だらけの上空で不注意で肉を下に落としてしまったことに気が付いた。わたしは急いで前に進んで探した。しかし、ひっくり返しても白菜、ひっくり返してもまた白菜、肉一切れも見つからない。」張三は言いながら、わざと箸で皿のなかをひっくり返した。

李四は意を察して、張三が言い終わるのを待って、続けて云う。「知っていますか。ある日、わたしは街で一枚のむしろを買った。道中、わたしを食べようとする1匹のオオカミに出会った。わたしは慌てて、自分をむしろで包んで、オオカミに云った。『あなたが食べるのはこのむしろですか。食べなくとも、このむしろ(＝宴席とかけている)がある。わたしの肉を食べたいというのはとても難しいです⁹。』」

《原典》 原題「两个吝啬鬼」、59頁。赵启雄(漢人)口述 1978年採集整理

(2) 2人の獵師

昔、草原に2人の若い獵師がいた。彼らの射撃の腕はもともとそれほど優れていないのに、高望みして、自分は並外れていると自負していた。

ある日、2人の獵師が約束をして狩りに出かけた。道中相談して云うのは、山中に行き、狩りをしよう。山中は狭く辺鄙なところ多く、身を隠すのに都合がよい。

山に入ると、2人はほうぼう探して、ついに隠れるのにとってもよい、狭く辺鄙なところを見つけ出した。とても喜んで銃をもって入り隠れ、獲物を待った。

初日、1匹の野兎が彼らの目の前に現われた。1人の獵師が見下して云う。「1匹のこんな小さいウサギなんて撃つに値しない。」もう1人の獵師が云う。「そうだ。ウサギをとって帰ってみな。友達にバカにされる。」それで、野ウサギを見逃がした。

2日目、1匹のオオカミが、彼らが待ち伏せしているところに飛び込んできた。1人の獵師が云う。「オオカミの肉は美味しくない。火薬を無駄にする必要はない。」もう1人の獵師が云う。「誰がオオカミの肉を食べることをありがたがるか。」そのオオカミは2人の獵師の銃口の下、大手を振って遠ざかっていった。

3日目、1匹の猪がやってきた。彼ら2人ともまた云う。「猪の毛皮は値打ちがない。」そこで、やはり一発も撃たなかった。

ひたすら待ち、さらに何日かが過ぎた。糶ももうすぐ食べ尽くす。彼らはやっぱり一つも収穫がな

⁹ 白菜の料理を食べようと食べまいと肉にありつくことはできない、ということ。

かった。1人の猟師が云う。「このようにぼんやり待っていてもよくない。方法を考えよう。1人がここで待ち、1人が獲物を探しに行き追い立ててくるのがいい。」もう1人の猟師がすぐに云う。「山道はデコボコして険しく、馬に乗れない。どうやって首尾よく獲物を追ってくるのだい。山を出て、見渡す限りの草原に行って狩りをしよう。」

「そうだ。」2人ともこの考えはかなり良いと思った。そこで、山奥を出ていき、草原にやってきた。

草原は確かに見渡す限りの平原である。草が十分に生い茂っていて、野生のヒツジが群れをなし、そこら中に出没していた。2人の猟師は丸一日追いかけたが、1匹も捕まえることができず、がつくり気を落とした。そんななか1人の猟師が不満そうに云った。「草原で狩りをするより、山の中の方がまだよかった。草原はあまりに平らすぎる。馬に乗って跳び跳ねることができても、身を隠す場所がなければどうしようもない。」もう1人の猟師が云う。「身を隠そうと思っても簡単ではない。スコップを探して穴を掘るというのはどうだい。」

その晩、彼らはある牧民の家に宿をとった。雑談をしているときに、主人は彼らにスコップを貸すのを承諾した。このような状況で、彼らはまた意気込み、翌日の猟の風景を思い描き、興奮して寝付けなかった。先を争って1人の猟師が云った。「明日十分に深い穴を掘って、おれが穴の中でしゃがんで見守っているから、お前が俊足の馬に乗っておれさまに野生のヒツジを追って来い。野生ヒツジがおれの頭上を通過するのを待って、発砲する。1発で1頭をうけあうぜ。」もう1人の猟師がすぐに彼の話折って云う。「それはだめだ。やたらに打ってはいけない。撃つなら、オスを選んで撃たないと。メスを撃ってはいけない。」

「なぜだい。」

「尋ねる必要があるかい。オスは体格が大きく、肉も多く、美味しい。」

翌日早朝、2人の猟師はスコップをかついで、猟銃を背負い、得意そうに出発した。出発前にさらに主人に対して云う。「おじさん、今晚食事を支度する必要はないよ。わたしたちが猟から戻ってくるのを待っていて、一緒に太った野生ヒツジの肉を煮て食べよう。」

2人の猟師が草原にやってくると、さっさと十分な穴を1つ掘った。1人が飛び込んで入り、仰向けに横たわり、銃を構えて待った。もう1人は馬に乗って遠くから野生ヒツジを追い立てに行った。

その時、草原に野生ヒツジはとりわけ多く、一群れで百にのぼった。馬に乗って野生ヒツジを追い立てる猟師は追い立てながら、口を大きく開けて大声で叫び、穴を見守る猟師に知らせた。「野生ヒツジが来たぞ。野生ヒツジが来たぞ。」

野生ヒツジの群れが全部駆け抜けても、猟師が銃を一発も放った様子が見られない。

野生ヒツジを追ってきた猟師はまた大変な労力を費やして、一群れの野生ヒツジを追ってきて、遠くからまた叫んだ。

「野生ヒツジが来たぞ。野生ヒツジが来たぞ。」

しかし、この大きな群れの野生ヒツジが全部穴を越えても、やはり銃を放った様子が見られなかった。

馬に乗って野生ヒツジを追ってきた猟師はまた野生ヒツジを探しに追い立てに行くほかなかった。結局、まるまる1日走りまわり、何回走り回ったか分からず、どれほどの野生ヒツジが追い立ててやってきたのかも分からないほどだった。走りどおしで、人馬ともに疲れ切ったが、終始一発の銃声も聞こえなかった。

日が暮れたときに、2人の猟師は1匹の獲物もなく、がっかりして、あの牧民の家に帰ってくると、家に入るなり、言い争いははじめた。

1人がとても怒って云う。「何頭もの野生ヒツジがお前の頭の上を走りすぎたのに、なんで一発も銃を撃たないのだ。」もう1人の猟師は少しもしり込みせず怒鳴って、「おまえは俺にオスを撃てと言っただろ。だけど、野生ヒツジは1頭1頭走るのがあんなに速くて、どうやって俺さまはオスカメスカを見分けることができるのだよ。」

《原典》 原題「两个猎人」、60-62頁。バーバ（著者の父、モンゴル人）口述 1988年採集整理

（3） 王様と平民

昔、2人の平民の兄弟が道を急ぎ、山奥に来たときには、持ってきていた糲と水はすべてなくなってしまっていた。彼らはこの山がこんなにも人気がないとは思っておらず、1日あまり歩いても、1軒の家も、井戸も、泉も見つけることができなかった。

彼らに飢えと渇きが同時にやってきたちょうどその時、はるか遠くから一隊の隊列がやってきた。兄弟2人は仔細に観察して、なるほど王様が10余人の従者と10余匹の猟犬を引き連れ、山に狩りに来ていることに気が付いた。兄はすぐに喜んで云う。「これはよかった。王様がこんなに多くの人を連れて山に狩りにきている。それなら少なからずの水と糲をきつともってきているはずだ。わたしたちは早く王様をお願いして、飲み物と食料を恵んでもらって、わたしたち2人兄弟の急場を助けてもらえるよう頼みに行こう。」

弟が云う。「王様は一日中満腹だ。われわれ平民の飢餓の苦しみが分かるものか。わたしたちが口を開いてお願いしたとしても、王様がわたしたちにに応じてくれるとは限らない。さらにましてこのご時世である。王様の役人、従者たちはみな勢力を笠に着て人びとをいじめる。われわれ平民を見ても、気をかけてくれるか。」

「それなら、どうしたらよいのだ。やっとのことであったこの機会をみすみす見逃すのか。」兄は慌てた。

「もちろん、見逃したりしない。しかし、わたしたちが弱いところを見せて彼らに物乞いするわけにはいかない。そんなことをしたら、人々はわたしたちを見下すだろう。」

「物乞いもしないで、彼らは進んでお前に飲み物と食べ物を与えるというのかい。」

「兄さん、焦らないで。その時が来たら、私を見ていてください。」弟は自信たっぷりに云った。

話しをしているうちに、その一隊の人馬が目の前にやってきた。兄弟2人は礼儀正しく前の方に進み出て礼をし、ごきげんをうかがった。王様の1人の従者は人の威を借りて一歩前に出て、鞭を振り上げて大声で、「どけ、どけ。王様の道をふさごうというのか。」と大声で叫んだ。兄はいそいで道脇によけたが、弟はわざと物珍しげに、きょろきょろ眺めて、独り言を云う。「王様は絶対に狩りに来ているのでしょうね。目的はキジや野兎ではないでしょうね。」

「ハハハ、キジや野兎などは取るに足らん。王様は1匹のキツネを狙っておられるのだ。」

1人の従者がここぞとばかりに王様の機嫌をとった。

「ああ、云ってみてもなあ。この禿山の荒れた峰にはキツネがいてと言ってもたったの1匹、2匹だ。わたしたちの家のところを比べるまでもない。群れを成したキツネがいたところを駆けまわって、、、弟はまたわざと独り言を云うふりをした。彼は以前、王様は狩りが好きで、とりわけキツネ狩りが好きなことを聞いたことがあった。

「それは本当か。」傲慢な態度で威圧し、かつて平民なんぞ見下して相手にしたことがなかった王様もこの言葉に引き付けられた。振り向いて命令するには、「早く案内しろ。われわれをキツネ狩りに連れて行け。」

「ああ、わたしたちもとても王様に尽くしたいのです。しかし、今はできません。」

「なぜだ。」王様は心の中でひそかに焦った。

「気持ちはあっても、力がでません。王様、実を云うと、わたしたち兄と2人は家を出て来てからすでに何日もたち、糲も食べつくしてしまいました。この禿山に入ってからすでに一日以上がたちます。水がほしくても1滴も見つけられず、食べるものを一口も見つけることができませんでした。わたしたちはまるまる一日水も米も腹に入れていません。なんといってもまず先に家を探し出して糲と水を乞わなくてはなりません。そうしなければ、おなか为空っぽです。食糧袋も水つぼも空っぽです。わたしたちのどこに王様を連れて長旅に行く力があるでしょうか。」

王様は聞くと、語気を緩めて、振り返って家来に命令した。「すぐに食べ物を彼らに与えろ。」

王様からの命令で、従者たちはいい加減に扱おうとせず、あわてて馬の背にある荷袋から煮た肉、王宮お菓子、キビ、チーズ、ミルクティなどを取り出した。兄弟2人はかつてこんなにたくさんの美食を見たことがなく、かつとても飢えていたので、手づかみで食べ物を食べ始めた。兄弟2人が腹いっぱい食べ、飲み終わるのを待って、しかも、水つぼと糲袋を満杯にしてやってから、王様は急き込んで訊いた。「おまえたちがさっき言った、おまえさんたちの家のまわりにはキツネが特別多く、群

れを成したキツネがいたるところを走っているとは、これ本当か。」

「それはもちろん本当ですとも。わたしたちの土地のキツネは群れを成して、本当に多いです。ただし、王様の犬が勝てるかどうか。」と弟が云う。

「なぜだ。」王様は訊きます。

「私たちの土地のオスキツネの頭に角が生えているからです。」

王様は訊いたとたん、騙されたと分かった。しかし、部下の前で面目を失いたくないので、わざと賢そうなふりをして、「はっはっは、オスの頭に角が生えているだって、それは野生のヒツジというものだ。お前というやつはキツネと野生ヒツジの区別もつかない愚か者だ。」

王様は従者を連れて、そそくさと立ち去った。ふたりの平民の兄弟は彼らの後ろ姿を眺めながら、大声を出して笑った。

《原典》 原題「王爷与平民」、63-65 頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述 1992 年採集整理

（４） 女王の鏡

大昔、生まれつき容貌が大変醜い女王がいた。しかし彼女はこれまでずっと自分が生まれつき醜いとは思わず、鏡に問題があると恨んでいた。

彼女は全国各地の腕のいい職人を一人一人宮殿に呼んできて、彼女のために念入りに鏡を制作させた。大きい、小さい、各種各様の鏡が数えきれないくらい作られた。しかし、1つの鏡として彼女を満足させるものはない。激怒して、彼女は命令してこれら職人をすべて殺してしまった。

のちに、ある1人の若い職人が宮殿に呼ばれてきた。この職人はとても賢く、彼は来てすぐにまず倉庫にある彼の前にそれぞれの職人が作った鏡を調べた。これら鏡自体に問題がないことを確認した。しかも、どれもすべて上等品だ。彼はまた女王の容貌をこっそり仔細に観察し、すぐにその意味するところが何かを理解した。そこで、この職人は作業工程をかせ、まず1枚の光を反射しない「鏡」を作った。次に、その上に念入りに1人の美女の頭部像を描いた。そのあと、彼は注意深く慎重にこの特殊な「鏡」を両手でささげるように持ち、女王に献上した。

女王は鏡を受け取り見ると、1人のとても美しい胸像が映っており、とてもうれしく思った。彼女はこの若い職人に手厚い褒美を与えた。

それ以来、女王は、自分が世界で一番美しいと思うようになった。彼女は常に車に乗って宮殿を出て遊覧し、自分の驚くべき「美貌」を示した。都市と農村の人民は女王の「ご容貌」を直接目のあたりにして、思わず「果たせるかな、『その名にたがわない』ものだな。」とこそこそ話した。

女王は、人々がみなうなずきながら、自分の美貌を感心して褒め称えていると思い、ますます得意

になった。

《原典》 原題「女王的鏡子」、138 頁。ガチンス（著者のおば、モンゴル人）口述 1992 年採集整理

3. 神話物語

（1） 老人長寿の物語

伝説では大昔、凶悪残忍な部落の首領がいた。かれは臣民に対してたくさんの規則を取り決めることを好んだ。彼の趣旨に背くものは誰でも、命令を下して斬首の刑に処し、見せしめにした。

ある冬、この首領はふと思ひ立ち、馬に乗り、従者を従えて宮殿を出て遊覧に行った。道中、何軒かの牧民たちが冬を越えられないヒツジを解体しているのを見て、すぐに「人が老いるのも、ヒツジが老いるのも、同じように役に立たない」と連想した。ちょうどそのとき、1 人の白髪の老人が、ひよろひよろ歩いて、動作が困難そうに向こうからやってきた。首領は尋ねる。「おじいさん、今年おいくつになられますか。」老人は答えた。「60 です。」このような老人はまだ何かに役立つだろうか、心の中で考えをめぐらした。彼は直ちに従者に命令を出して命令を伝達させた。「今後 60 歳になったすべての老人は、一律にすぐに処刑にする。」

情報が広がると、怒って罵倒しない人民はいなかった。だが命令に逆らう者はいない。父母がまだ元気に生きているのに、無理に冬を越えられないヒツジを解体するのと同じように、彼らを処刑する。子としてどうして手を下せようか。しかし、もし処刑しなければ、斬首の罪を犯したことになる。仕方なく、老人が 60 歳になるのを待って、子どもたちは目に涙をためながら、肥ったヒツジのしっぽを煮て、老人に一口一口食べさせ、直接老人が窒息死するか、食べ過ぎて死ぬまであたえた。父母が亡くなった後、孝行な子どもたちはただこのように自分を慰めた。「食べ過ぎもしくは窒息死でも刀で殺されるよりはいいだろう」と。

部落に 1 人のサインフーという名の若者がいた。彼は幼い頃から父と頼りあって生きてきて、老人に対して大変よく仕え、父が 60 歳になった時、どうやっても父と生き別れることも死別することもしのびず、心を鬼にしていかなる「よい」方法によって父を死に至らしめることはなおさらできず、こっそり穴蔵を掘って、父をその穴蔵のなかに隠し、毎晩こっそり父に糰と茶を届けた。このようにしていつの間にか 3 年が過ぎた。ある日、サインフーはご飯を届けおわった後、父の近くから長い間去ろうとしなかった。父は異常を感じ、息子に何事が起きたのかと訊いた。彼はようやく心痛めながら云う。「ああ、かわいそうなお父さん、これがあなたに届ける最後のご飯になりました。わたしは家にあるすべての麦を調理して、はったい（麦粉がし）にしてもってきました。年老いたあなたさまはこの少しの食物を儉約して長持ちさせてゆっくり自分の命を維持してください。1 日でも長く生き

られることが息子である私の心からの願いです。」父は息子が話し終わるのを待たずに、切羽詰まった様子でいったい何が起きたのかを訊いた。サインフーは云う。「最近部落に大きな事件が起きています。どこから逃げてきたのか知らないが怪物がいます。体つきはラバのようで、様子はまるで鼠のようです。とても残忍で、家畜の肉を食い、人の血を飲み、部落の人々と家畜は混乱して穏やかではなく、臣民たちはしきりに部落の首領に上申し、兵を派遣して妖怪を倒すように求めました。民心を安定させるために、首領は兵を派遣し、その怪物を捉え、退治させようとしたしましたが、いかんとも相手にならず、最後に怪物を誘い出して大きな鉄かごに鎖でつなげただけでした。これが飢えて再び籠を出て、あたりで人を傷つけるのを防ぐため、中に三重、外に三重に兵で守り、毎晩1人の人民をその怪物に差し出すことを命令しました。」ここまで話して彼の声は低く小さくなった。「明日の夜がわたしの番です。命を落とします。」

父は聞き終わると、少し考えて云った。「お前の云う状況から、わたしはその怪物はおそらく化けネズミだとみている。もし本当に化けネズミなら、倒す方法がある。」「どんな方法ですか。」「急ぎなさい。明日暗くなる前に必ず4月8日生まれのヤマネコを探し出さなくてはならない。こうして、明夜おまえがその怪物に会うときに、そのネコをお前の衣服の袖に隠して一緒に連れて行き、その怪物がとびかかってお前を食べに来たとき、袖からそのネコの頭を見せろ。もしその怪物が化けネズミなら、ヤマネコを見た途端、おとなしくなって形を変えるだろう。このようにして3回繰り返すと、その怪物は1匹のうさぎと同じくらいのネズミになる。その時、ヤマネコを放せば、そいつが始末してくれる。」サインフーは父の話の聞くと、その穴を出て、すべての時間を使って4月8日生まれのヤマネコを探し、ついに2日目の日が暮れる前に、大きな山で狩猟を生業とする家の中から1匹見つけ、それを袖に隠してその怪物に会いに行った。

サインフーが鉄かごに入れさせられた後、彼がしっかりと立つ間もなく、その怪物は凶暴に襲い掛かってきた。彼は急いで袖口からそのヤマネコの頭を見せた。その怪物がネコの頭を見るとすぐに、一回り小さくなり、かごの角に引き下がった。しばらくすると、その怪物は再び襲いかかってきた。サインフーはまたネコの頭を袖口から見せた。怪物は見るとまたぐんぐん小さくなった。しばらくすると、その怪物は再び襲いかかってきた。サインフーはまたネコの頭を袖口から見せた。怪物は見るとまた小さく、小さくなった。しまいにはウサギと同じ大きさのネズミになり、やたらと走り回っていた。ヤマネコはそれを見ると襲いかかり、かみ殺してしまった。

2日目、兵隊はサインフーが生きて鉄かごから出てきたのを驚いてみていた。一斉にとり囲んでこの奇跡を見に来た。

怪物が丸腰の人民に退治されたというニュースはあっという間に広がった。部落首領は半信半疑ですぐにサインフーを呼び出して謁見した。

「おまえはどのようにあの怪物を退治したのだ。」首領が訊いた。

「あの怪物は本来化けネズミです。わたしは1匹の4月8日生まれの子でそれを退治しました。」

首領は不思議に思ってまた訊いた。「お前は どうやってあれが化けネズミだと分かったのか。」サインフーは首領の前で事実を話さざるを得ず、ただ言った。「わたしの父が私に告げたのです。」

「お前の父は今年何歳だ。」

「63歳です。」サインフーはうつむいて答えました。

「ああ、もう一度言え。」

「63歳です。」

「なぜ死んでないのだ。」

「父はとてとてもたくさんの道理を心得ています。またとてもたくさんの経験があります。父と離れてわたしは生活できません。わたしはまた彼を死なすことが忍びありませんでした。」

「かれはどこにいる。」

「穴のなかです。」

首領は聞くとしばしの沈黙の後、云った。「彼が死んでいなかったおかげだ。早く行って彼を出してきなさい。」

これ以降、この首領は人が老いたからといって役に立たないと思わなくなった。しかも、命令を下した。「人が老いた後は、若輩者たちはさらに老人に孝行しなくてははいけない。彼らに安らかに晩年を送らせるよう。」

臣民人民たちはとても喜び、肥ったヒツジのしっぽを煮て、厨子にお供えし、老人の長寿を祝いした。この習俗は今でも続いている。

《原典》 原題「老人延寿的故事」、235-238頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述 1988年採集整理

（2） 月と太陽

伝説ではるか大昔、大地はあたり一面真っ暗だった。のちに、2人の光を発することができる神様がやってきて、大地によく光明がもたらされた。この2人の神様がつまり月と太陽である。

月と太陽は2人の兄妹だった。月が兄で、太陽が妹である。兄妹の2人は親密で隔たりがなく、非常に仲がよかった。彼らは容貌が輝くばかりであるため、どこに行ってもあたり一面光ばかりであった。しかし、彼らが家に帰り休む時はいつも、大地は相変わらずあたり一面真っ暗で、このようにして昼と暗夜の区別ができた。

ある日、兄は夜中に目をさまし、大地が一面真っ暗であることに気が付き、手を伸ばすと5本の指

も見えず、心の中で考えた。「天地がこんなに真っ暗で、影すら見えないなんて、人びとの生活はどんなに苦痛で耐え忍び難いであろうか。」そこで、月の兄さんは太陽の妹を大急ぎで呼び覚まし、どのようにして交替して大地と人間に光を与え、人間に幸福をより多く与え、困難を少なくするかを相談した。

妹の太陽は兄の月の話を聞いて、少し考えて云う。「私たち 2 人が別々に出て行き、かわるがわるに人間に光を放つのはもちろんよいです。ただ、暗闇の中に私 1 人で行くのはとてもこわいです。」

兄の月はすぐに彼女を慰めて、「お前は昼に行き、俺が夜に行く、それならこわくないだろう。」

妹の太陽はまた云う。「でも、わたし 1 人で行くのは、やはり少し恥ずかしいです。」

「うん、それならこれはどうだろうか。」兄の月は愛おしそうに云う。「その時お前さんを見る奴は誰でも、金の光で彼らの眼を刺せば、お前さんの容貌をはっきり見えないよ。」妹の太陽はこのようにしてうれしそうに承諾して下りて行った。

これ以降、月と太陽の兄妹は別々に出て行き、人間に明かりをもたらした。

兄妹の 2 人は物事をするのに大変真面目で、毎日 1 人がちょうど帰ってくると、もう 1 人が急いで出て行き、本当に忙しくてまるでお互いをかえりみることもできず、あるときには顔さえも見る事ができず、このようにして瞬く間に何年もの年月があつという間に過ぎた。

一日が過ぎ、また一年が過ぎた。太陽と月は精を出して人間のために光をまき散らす。別離の苦しみはずっと感情にもろく、感傷におちいりやすい兄妹の 2 人を落ち着かせなかった。ある日、兄妹 2 人はついに一緒にやってきて、互いに悲しみを述べ合った後、2 人はある方法を相談して決めた。というのは、毎月 15 日くらいすぎたたら、兄妹 2 人は 1 人が少し早くやってきて、1 人が遅めに出て行き、特別に会って、心の内を語りあうと。

それ以来、月と太陽の兄妹 2 人は果たして毎月 15 日くらいが過ぎたところで、続けて何日間か少し早くやってきて、1 人が遅めに出て行き、うれしそうに会って、心の内を語り合い、お互いに吉祥と平安を述べ合った。

何万年も過ぎ、今に至った。毎月その何日間になると、太陽は東から登り、月はまだ西にあり、別離を惜しんでいる。

《原典》 原題「月亮和太阳」、239-240 頁。ウサラゴワ（著者の母、モンゴル人）口述 1989 年採集整理

引用文献

児玉香菜子 2005 「中国内モンゴル自治区オルドス地域ウーシン旗における自然環境と社会環境変動の 50 年」『地球環境』10-1:71-80

2014「モンゴル牧畜民の農耕実践—ウーシン旗の事例から—」『昭和女子大紀要：中国の経済発展と少数民族の文化的変容』19／2013：27-35。

モスタールト・アントワース 磯野富士子訳 1966『オルドス口碑集』東洋文庫

モスタールト・アントワース 村上正二訳 1985「オルドス・モンゴルに関する民俗資料」『モンゴル研究』16:54-86。

1986「オルドス・モンゴルに関する民俗資料」『モンゴル研究』17:81-106。

銭世英 1999『鄂尔多斯民间采风』内蒙古人民出版社。

烏審旗誌編集委員会 2001『烏審旗誌』内蒙古人民出版社。

楊海英 1991「家畜と土地をめぐるモンゴル族と漢族の関係」『民族学研究』55-4:455-468。

2002『オルドス・モンゴル族オーノス氏の写本コレクション』JCAS Occasional Paper no.13 国立民族学博物館地域研究企画交流センター。

2003「漢族がまつるモンゴルの聖地—内モンゴルにおける入植漢族の地盤強化策の一側面—」『民族の移動と文化の動態』塚田誠之（編）、pp. 293-341、風響社。

烏審旗人民政府 HP「乌审旗 2014 年国民经济和社会发展统计公报」

http://www.wsq.gov.cn/xxgk/tjxx/201505/t20150507_1383808.html（2016 年 9 月 15 日最終閲覧日）。

謝辞

原著は翻訳者が 2001 年ウーシン旗でフィールド調査中に入手したものである。寄贈者に心よりお礼を申し上げる。翻訳は中国朝鮮言語文化論演習で進めた。ゼミ生およびティーチングアシスタントのソロンガさんにも感謝の意を記したい。

（こだま かなこ・千葉大学文学部）

Collections of Ordos folktales (1): Qian Shiying, 1999, Huhhot

KODAMA, Kanako

This text is a partial translation of of “Ordos Folklore Collections” (published by Inner Mongolia People’s Press, 1999). The original title is “鄂尔多斯民间采风 (*Eerduosi minjian caifeng*)” by Qian Shiying. The original manuscript was written in Chinese. This book contains eighty-six folktales collected in the Ordos district of the Inner Mongolia Autonomous Region, China and arranged by the author. The author, Ms. Qian, was born in 1953 in Üüsin (Wushen in Chinese) Banner (an Inner Mongolian administrative division at the county level), which is located in the south of the Ordos district. According to her afterword, she is a descendant of Mongolian pastoralists.

The stories fall into three categories: 28 are stories about animals and plants, 34 are stories about people, and 24 are myths. I translated 12 folktales: 6 about animals and plants, 4 about people, and 2 myths. In the original, each folktale concludes with the name of the narrator and the year it was collected and arranged. The collection spans almost 20 years, from 1978 to 1996. The narrators are mainly the author’s parents and aunt. However, there are other names, some of which are Han Chinese. Both ethnic Mongols and Han Chinese live in Üüsin Banner. This is reflected in the texts. The folktales show us the livelihood and worldview of both Mongols and Han Chinese of the area.